

進むにぎわい づくり

町内のさまざまなところで、「にぎわいづくり」の活動が進められています。ここでは、その一部の活動と、それに携わる人たちをご紹介します。



有限会社福馬果樹園
代表取締役
ふくまもりひろ
福馬盛寛さん

町の新たな特産品開発

益城町を代表する特産品の一つである「太秋柿」を生産・販売する福馬盛寛さんは、農業法人として「シンデレラ太秋」などの自社ブランドの高品質な農産物を生産するかたわら、「益城町のためにできることは何だろう」と考え、ふるさと納税の返礼品として、自らが生産する太秋

柿やレモンを使用したクラフトビール「マシキマム」を開発しました。

ふるさと納税による復興に向けた財源の確保や、益城町のPR効果も期待できます。

「益城町に関心を持ってもらう」という町のにぎわいづくりのきっかけとなる民間発の取り組みがスタートしています。



クラフトビール
「マシキマム」

益城町にぎわい
活性化補助金を
活用



柳島まちづくり協議会
会長 古荘直樹さん

住民主体のまちづくり

会社員の古荘直樹さんは、生まれ故郷の柳島地区でまちづくり協議会の代表として、地域課題の解決に向けた住民主体の活動をしています。

例えば、自分が幼いころに楽しかった地域の行事を復活させたいとの思いから、20年ほど前から途絶えていた「お花見」と、「防災訓練」や「炊き出し訓練」を一緒に開催するなど、「既にあるものにアレンジを加えて少しだけ頑張る」取り組みを実践し、参加者も年々増加しています。

行事を頑張りすぎるのではなく、継続することを大切に、地域住民が楽しみながら参加できる地域のにぎわいづくりが進められています。



柳島緑地公園清めたい
開所式では、参加者全
員でテープカット

「熊本地震」記憶の継承

堂園で農業を営む永田忠幸さんは、益城町語り部の会の一員として、教育旅行で益城町を訪れる高校生などに、熊本地震の経験や教訓を伝える活動をしています。

震災遺構の案内に加え、学生時代の体験や熊本地震後の仮設住宅での

生活など、自らの経験を交えながら説明し、地震にまつわ

る地域の伝承を例に、自分の住む地域に目を向けて、災害に備えることの必要性をわかりやすく伝えていきます。



学生たちに堂園断層を説明

語り部の活動は、地震の記憶を継承するとともに、益城町に

来なければ体験できない新たな「資源」であり、町外からの誘客を促進することが期待されます。



益城町語り部の会
ながただゆき
永田忠幸さん

健康づくりを通じた地域連携

理学療法士の吉住慶太さんは、美しく歩くことを目的とした多人数での筋力トレーニング「美・ウォーキング」の取り組みを推進しています。

この取り組みは、介護予防などの優れた取組みを表彰する、厚生労働省「第8回健康寿命をのばそう！ア

ワード」で優良賞を受賞しました。現在、新型コロナウイルス感染症の影響で多人数での活動が難しいため、神社の境内など屋外を含む複数の会場をオンラインでつなぎ、リモート運動教室を実施していま

す。取り組みの輪は、県内をはじめ、東京や韓国などにも拡大しており、健康づくりを通じた地域の連携が生まれています。



社会福祉法人慈光会
よしずみけいた
吉住慶太さん



リモート運動教室